

泉

次代への贈りもの



泉—次代への贈りもの—
平成元年9月10日初版第1刷発行
定価 1800円

編集者 江崎 玄

発行所 株式会社 星文社

いづみ編集部

東京都千代田区神田駿河台一丁目

コトノ驛同社(三)

電話 三〇三二二九五・二四三七

印刷所 中央精版印刷株式会社

●本書は「いづみ」編集部が、平成元年9月10日に発行された「泉」の再刊本である。この再刊本は、原書の内容をほぼそのままに、紙質や印刷技術の進歩に合わせて、より美しく、より読みやすいように再編集されたものである。また、本書の発行に際しては、関係者の皆様から多くの御意見をいただいた。本書の発行に際しては、関係者の皆様から多くの御意見をいただいた。

Seibonsha

Printed in Japan

〒816 福岡県大野城市船瀬町5丁目4番21号
株式会社 ジエイエムシー音楽研究所
代表取締役 大畑 惠三
TEL092(575)3267・FAX092(581)6797

「音楽元年」 音楽の夜明けを求めて……

榑 ジェイエムシー音楽研究所代表取締役社長

大畑 恵三

日本は欧米の技術を導入し、改良を加えることにより、安くしかも優秀な製品を輸出してきた。しかし一九八七年以後の円高及び東南アジア諸国の追い上げを期に、日本の産業界にも変化が現われはじめる。基礎研究の重要性が唱えられ、以後急速にその方面の充実がみられるようになった。以前には考えられない現象である。基礎研究は欧米にまかせ、その結果出来上がった製品の真似をして、さらに改良を重ねるというのが日本の方法だったのである。

平成元年。時代は正に変わりつつある。二十一世紀を目前に、日本人に真の獨創性、創造性が求められる時代になった。バッハ、モーツァルト、ベートーベンに続く大作曲家。文豪、詩人、哲学者……十八・十九世紀の西欧文化は人類に不滅の遺産を残した。二十世紀はアメリカの時代。アメリカ文化の底力に匹敵する二十一世紀の日本文化は果して誕生するのだろうか。

私が桐朋学園音楽科に入学したのが昭和四十一年（一九六六年）、東京オリンピックを成功のうちに終え、大阪万国博覧会を数年後に迎えようとする時期だった。音楽の留学生は非常に少なく、海外の音楽情報も十分に入ってこない時代。欧米の楽壇は遙か高みに感じられ、教師から生徒に至るまで咽から手がでる思いで本場の演奏技術を求めたものだ。それは、どこか産業界の様子とも似ている。

この七年前に小澤征爾がブザンソン指揮者コンクールに優勝。驚きと同時に将来への希望を与えてくれたニュースだった。そして又、高度成長期のピアノ・ブームがこの時代に続く。これ以後、日本が豊かになるにつれ、留学生も爆発的に増加した。海外コンクール入賞も増え、今日では取り立てて新聞沙汰にもならぬほど日常的な出来事となっている。

しかし一方、私が大学に入学する二年前、経営難を理由に東京交響楽団の事務局長が入水自殺。以後、同楽団は楽員の自主運営団体として活動を続ける。六年後にはフジテレビが日本フィルハーモニーに対する経済的支援を打ち切り、楽団は分裂、日本フィルと新日フィルに分れてそれぞれ自主運営が始まる。ちなみに東響はその前身を東宝交響楽団と言いつつ、往時最高のオーケストラ（私の伯父、故大畑保も首席フルート演奏として活躍）だったし、日フィルも当時最高の楽団であったのだ。私の大学時代は、音楽が盛んになる一方でこのようなオーケストラ受難の時代を目の当たりに見ることになる。以後「なぜだろう？」……と言う思いが頭から離れなかった。



ウィーン国立音楽院での演奏会



指揮する筆者

数年間実社会で仕事をした後、欧州に留学したのが昭和五十四年（一九七九年）の事である。ウィーン留学中に西洋音楽の歴史の質と、音楽愛好家の層の厚さの差を知ることになる。むろん日本にその質もその厚さも無いことは言うまでもない。日本にあるのは真の音楽を追究したいと願う音楽家の情熱と世界レベルに達した技術力のみである。このような土壌の上に何の花を咲かせようとするのか。どうすれば花を咲かすことが出来るのか。これがウィーン留学末期の私の課題となった。

音楽の世界ではユダヤ系の音楽家が優秀であるが、これは単に才能だけの問題ではない。才能ならば日本人も決して劣るものではない。ユダヤ人と日本人とに差があるとすれば、それは音楽家を支える組織力の差である。これが最終的に世界に通用する音楽家の数の差につながる。社会主義国においては、優秀な音楽家は国家によって支援される。なにも無いのは日本だけである。音楽家として手をこまねいて傍観しているわけにはいかない。「国家や企業がしてくれないのなら、自分の足で立とうではないか」……これが八年前、私の方針を決定した。

なぜオーケストラは経営難を逃れられないのか、世界の経済大国になっても国立オペラ一つ持てず、オペラ座の運営体制の目処すら立っていないのか。それは、音楽家が音楽家の頭脳と感性のままに「経営」までをやったのけようとするところにある。音楽のプロでなければ、音楽を活かして育てるカンドころは分からない。経営のプロでなければ「金食

い虫」のオペラやオーケストラを維持することすら難しい。双方を両立させる能力が求められる。

十年計画を立てた。先ず十年間の演奏活動の停止と「経営」の勉強……。こうして、音楽だけを考えてきた人間が、三十五歳にして音楽以外の多方面の勉強を始めたのである。初めの五年間はかなり苦痛を感じながら勉強したことを白状する。音楽家とは変な生き物である。日頃感性だけで生きているので、それ以外の脳を使うことが自分の感性を損なうのではないかと言う強い不安感にとらわれる。「何でもやる！」を心に決めてから、やっと少しずつ世の中が見えてきた。そうなると思議なもので、音楽が人間にとって自然で素直なものとして理解できるようにもなった。経営の実地は音楽教室を経営することで勉強する。元来「本物を育てたい」と始めたこの勉強には持つてこいのものであった。

確実に育ちつつある子供達が八年間の勉強を支えてくれたのかも知れない。いや、それだけでは無い。理論物理学者のN氏は、八年間私の学ぶべき沢山の本を指し示してくれた。「全面的に協力する」と言ってくれる東京音大のN教授。「一緒にやりましょう」と帰国の度に連絡をくれる指揮者のM氏。彼はすでに東欧のオーケストラの重要なポストに就いている。そしてこの四月、九年振りに芸大助教授のW氏と会った。一日楽しく話し、酒を酌み交わした彼が手紙をくれた。

「ハンガリーで二人で話し合ったことを、実際に実行していることに感心した……お互いの日本の音楽の為にがんばりましょう」。

「日本の音楽の為に……」このような心を持ち続ける友人達に支えられてきたのだと思う。

平成元年2月14日、株式会社ジエイエムシー音楽研究所、法人設立登記完了。平成元年11月本社屋落成。



指揮する筆者